

(1) 東北地区研究会 (2000 年度)

日 時：2000 年 9 月 30 日 (土) 13 時 30 分～16 時 30 分

場 所：仙台市青年文化センター

出席者：細谷昂、小林一穂、佐久間政広、武田恭治、山下亜紀子、島貫秀樹 (非会員)、
佐藤直由

報告：山下亜紀子「福祉サポート源に関する農村高齢者の評価意識についての考察
—青森県黒石市の調査をもとに—」

山下会員の報告は、青森県黒石市の純農村地区 (農家世帯率 65%) でおこなった福祉サポート源に対する高齢者の評価意識の調査結果にもとづいてなされた。調査の課題は、地域における各福祉サポート源についての評価を検討することと、この評価に家族的状況が影響力をもっているかどうかを検討することにおかれている。山下会員は、福祉サポート源の提供主体の現代的形態を、藤村正之 (1999) に依拠して、「自助」(愛情に基づく)、「互酬」(血縁、地縁、社縁、選択縁に基づく)、「再配分」(法と観念に基づく)、「市場交換」(企業がおこなう) という四つの領域に区分してとらえ、さらに先行研究を整理するなかから、介護者の側では心理的抵抗感や社会的、地域的、家族的な背景によって、自助的な福祉サポートをおこなっているということと、介護の当事者となる高齢者世代では再配分領域に属する福祉サービスに対する期待が子世代よりも高い、という二つの結果を抽出し、調査地である農村部においての検証も企てている。

結果の分析では、自助の領域への期待の高さがあるものの、公的サービス (再配分領域) や住民参加型サービス (互酬領域) への評価の高さもみられることから高齢者の意識における福祉サービスへの期待の高さを指摘するとともに、家族形態が高齢者の福祉サポート源とりわけインフォーマルな福祉サポート源に対して規定力を持ってはいるものの、家族の小規模化が公的サービスや住民参加型サービスへの期待の高さに作用しているわけではないことも指摘している。さらに、聞き取り調査からは、自助のサポート源に期待しつつも家族の就労状況によって福祉サービスの選択なかでも在宅サービスの選択がなされていることから、福祉サービスへの心理的抵抗というよりも家族への遠慮がそうした選択をさせていると指摘している。

山下会員はこうした結果から、農村部においても自助領域に大きな期待がみられるものの福祉サービスへの期待があり、その必要性が増大する可能性があること、また、高齢者のサイドからの福祉サービスの選択という意識は、介護者のサイドからの福祉サービスへの抵抗感という意識とは異なるものであり、そこに介護する側と介護される側との意識のギャップがあること、を導き出し、さらに、農村の高齢者は家族の変化と自助サポート入手の困難さを認識していることを明らかにしている。

報告後、調査対象者の属性やデータ上のバイアスをめぐる議論や、サポート源に対する農村高齢者の意識の問題、親世代と子世代の介護をめぐる意識のギャップがなぜ生じるのかといった点について活発な質疑、議論がおこなわれた。

(文責：佐藤直由)